

## 序説

口永良部島の歴史を調べると太古の昔から文化圏があった。それも日本中央にとって、南の辺境の地で監視の届かない所である。口永良部島の認識は江戸時代になってからと言っても過言ではないが、以前にも頻繁に交易の中継点として活躍していた事があり、重要な拠点であった。今回は絵図を中心にまとめるのが目的である。

## 第1章 絵図の始まり

和銅6年(713年)5月元明天皇は、日本風土の調査を命ずる。日本で最初の調査である。この調査は土地の肥沃や名簿・伝説の事で郷土研究のようなものである<sup>1</sup>。全国に広まったのであるが、しかし諸国一斉に完成しなかった。現在尊重される風土記は五つである。常陸・播磨・出雲・肥前・豊後である。この中でも出雲の外は完本ではない。<sup>2</sup>

## 第2章 絵図の発展

646年の大化の改新の詔により風土記を奉る事、地図を作るべきこと、土地命名の法令が出来た<sup>3</sup>。これは70～80年を繰り返して行われた。最も完本が「出雲風土記」である。その中には、古傳を第一とし境域・郷数・道路の遠近・神社寺院、その遠地山・川・濱・海・島嶼・坂路・驛・市場などである。現在でもあまり変わらないと思う。山・川によって国の境界を正しくすることは地図の基本である。そして自然現象に注意し、住居・住民と記録する。と村・郷・神社・寺院・古蹟・士族の人文現象に及ぶ。「日本地理学史」によると「既に確立した地理学的見解が成立していたのである」<sup>4</sup>とある。我が国は、志那学の、周以後秦漢六朝学の影響を受けている。そして決して幼稚なものでは無く正史に並行して記されたもので学問的な裏付けの下で、国司・下役が在官中に記した。<sup>5</sup>

## 第3章 国司・郡司の発達

国司・郡司がどのように志那の制度を取り入れていったか詳細は解らないが、当時の国学や大学で貴族の子が如何に学び地理的な素養ができたのか理解する必要がある。大学は五位以上の子孫及び東西史部子弟其の他であり、国学生は郡司の子孫、13歳以上16歳以下

---

1 日本地理学史 P11

2 日本地理学史 P16

3 日本地理学史 P23-24

4 日本地理学史 P25

5 日本地理学史 P26

の青年である。やがて「紀傳の博士」と呼ばれた。中でも算学生は、測地・計算の術を学んだ。これが出来ないとは士官に任せられなかった。特に知との測量と租税の計算に当たる人を養成した。

#### 第4章 絵図(地図)の基礎

大化の改新に於いて郡司は「班田収授の実行を郡司に命じ、これによりに各国の境界が明らかになった。そして「日本書紀」によると天武天皇 13 年(684 年)に「信濃国之図」を作らせている。おそらく各国地図も出来たであろうことが想像できる<sup>6</sup>。藤原京も平城京もこのようにして出来た。測量専門家が何回も派遣され結果、地図上に按配された。

#### 第5章 国境の整備・国籍

天武記 12 年(683 年)12 月に、伊勢王以下三人の公卿に判官、録史、工匠の多人数をそろえて、天下に巡行させ諸国の限界を定める<sup>7</sup>。勿論国境制定の大事業は大袈裟であった。履中天皇の 4 年(403 年)に、「新撰姓氏録」によると坂合部連が国境の標を立てたので、「サカヒベ」という姓を得たとある<sup>8</sup>。東国三連の国境測定も精密になっていった<sup>9</sup>。そして文化の改革も容易になり好字を以て国郡の名ができた。天武天皇の 14 年 9 月には 6 道への使者もでた。686 年天武天皇崩御の時は悲劇が大きかった。従って天武天皇の御世になって、日本の今日の国と言うものが、大方できた<sup>10</sup>。

#### 第6章 「田籍」・「国籍」の誕生

古い日本図は「行基図」と言う認識がある。行基は僧侶であり才学の持ち主であったので僧侶が関係していたことが言える。寺院が図を奉った事は余程古く元明天皇の和銅 6 年(713 年)4 月、丹波、美作、大隅等の国を母国から分たれ、新に權衡度量を天下に頒布された。と言う命令が出た<sup>11</sup>。これは寺の田畑の外、敷地、山地が多かったからである。これらの土地に仏閣を作った。当然近畿の山岳に行基菩薩ができたとしてもおかしくない。行基菩薩が活躍した天平の聖武天皇の 10 年(738 年)8 月に「国郡の図を造り進めしめられた」<sup>12</sup>とある。従って天平 10 年からしばらくして、国絵図と言うものが、政府の手に集められた。その後「籓里の制」が実行され「田籍」ができ、同時に「国籍」ができた。

「三代格卷 15、弘仁 12 年(822 年)12 月 26 日の官符で明らかである」。<sup>13</sup>百姓や仏教の影

---

6 日本地理学史 P 31

7 日本地理学史 P 34

8 日本地理学史 P 36

9 日本地理学史 P 36

10 日本地理学史 P 37

11 日本地理学史 P 38

12 日本地理学史 P 40

13 日本地理学史 P 41

響が強くなり「民部省図帳」が出来たことが解る。王朝以降鎌倉時代 1300 年頃その形を伝えた。1322 年の寫本であるから前記目録のものよりも新しく、或は偽物かもしれないがこれによって民部省の過去の本物を偲ぶことができる。

## 第7章 行基図の経緯

国籍ができると、郡には郡図、国に国図が出来た。その一つ一つをまとめて「日本図」と言った。「いかなる理由かは解らないが、古代から徳川時代の中頃迄、大日本国図と言えは行基作と言う事になっていた」<sup>14</sup>行基図は、山城を中心として五畿七道の道筋を描き、それに国々の位置をしるしたものである。しかし行基は奈良時代の人であるから、山城の中心図を描くわけがない。従ってこの図は行基の図ではない<sup>15</sup>ということになる。京都下鴨神社に、藤貞幹は見たとあるが現在ではない。龍谷図書館の「皇年代記」の神代より永祿頃に至る年表にも図がない。しかし大阪博多九久吉出版「萬国年代記」(明治 27 年)には行基図入りのものがある。いずれも二つのものは実在しない。行基図の変遷を探っていきたい。

## 第8章 行基図の変遷

全国的に国郡国ができたのが、天平 10 年(738 年)8 月の令である。やがて延暦 24 年(805 年)に改定された梨木三位の記録は決し無稽の説ではない。「日本後紀」をみると延暦 15 年(796 年)8 月に詔がでていいる。と言う事は地図も古くなり新しく改訂されたとするならば辻褄が合うのである。何故「行基図」と言ったかは、本朝書籍目録では、藤貞幹の説では、藤原業忠が、永享 11 年(1439 年)室町時代に足利義教に奉ったと言う本であるが嘘である。藤原實冬の建治 3 年(1277 年)から永仁 3 年(1295 年)迄の間のもので、鎌倉時代北条貞時の頃には存在した古本である。この本の地理部に、「国府記七巻行基菩薩撰」と書目があり、天下を周遊した行基の手によって地理書が出来、それが日本国であり、行基菩薩の作とあったからであろう<sup>16</sup>。「行基大菩薩行状記」は和文であり、出来た時には行基の作ったと言う日本図は流布していた。行状記は後人の作である。今日の最古の行基図は、仁和寺書籍目録であり、仁和寺心蓮院の所蔵である。南を上北を下にしてある。今日普通民間で、行基図と言うのは、「拾芥抄」にのっている北を上にした南を下にしたもので慶長活字版を以て刊行の祖である。「拾芥抄」の作者は、洞院公賢である。延元 5 年(1360 年)70 歳にして名臣で、後醍醐天皇の御世内大臣、光明院の御世太政大臣、「園太暦」の著者である。

## 第9章 「<sup>じゅうがいしやう</sup>拾芥抄」のゆくえ

「拾芥抄」の行基図は日本に流布しただけでなく、「日本一鑑」の著者志那人鄭舜功が

---

<sup>14</sup> 日本地理学史 P 43

<sup>15</sup> 日本地理学史 P 44

<sup>16</sup> 日本地理学史 P 47

持ち帰り流布した。鄭舜功が日本に来たのが嘉靖 34 年(足利義輝の時代)で、廣東から出船し、豊後大友宗麟の許に着いた。日本で材料を得て、1557 年帰国して「日本一鑑」を書いた。同時期沈孟鋼も行基図を伝えている。交通の発達で流布しているが、断言してようが「行基図」の原據は嘉元 3 年(1305 年)に既に日本に存在している<sup>17</sup>。

処が朝鮮では、陽村權近の「混一疆理圖」が同一の行基図がついている。「混一疆理圖」は建文 4 年(1402 年)の作である。図には後の世の日本地図(寛文 2 年の行基図)に加え日本以外の地名もある。建文の時代は 1402 年で足利氏一代を通じて行基図が、鄭舜功が志那に持ち帰る以前に挑戦に渡ったと言う事である。朝鮮にはこの他にも成化 9 年(1473 年)に、申叔舟稽の「海東諸国記」がある。そこにも立派な行基図が入っている。この図が朝鮮での源流となる。従って「日本一鑑」よりも約 70 年も前に行基図は、「海東諸国記」に入っていた。

そこで「行基図」は「拾芥抄」のものを以て日本での標本とするので海外の地名はない。しかし、「日本一鑑」や「混一疆理圖」又は「海東諸国記」の行基図は外国名があるが類似の地形を示している、少なくとも足利時代に流布した「行基図」は、「拾芥抄」の図とは違っている。だから「三国の差図」<sup>18</sup>を作って日本に広めた。

## 第9章 絵図からの口永良部島

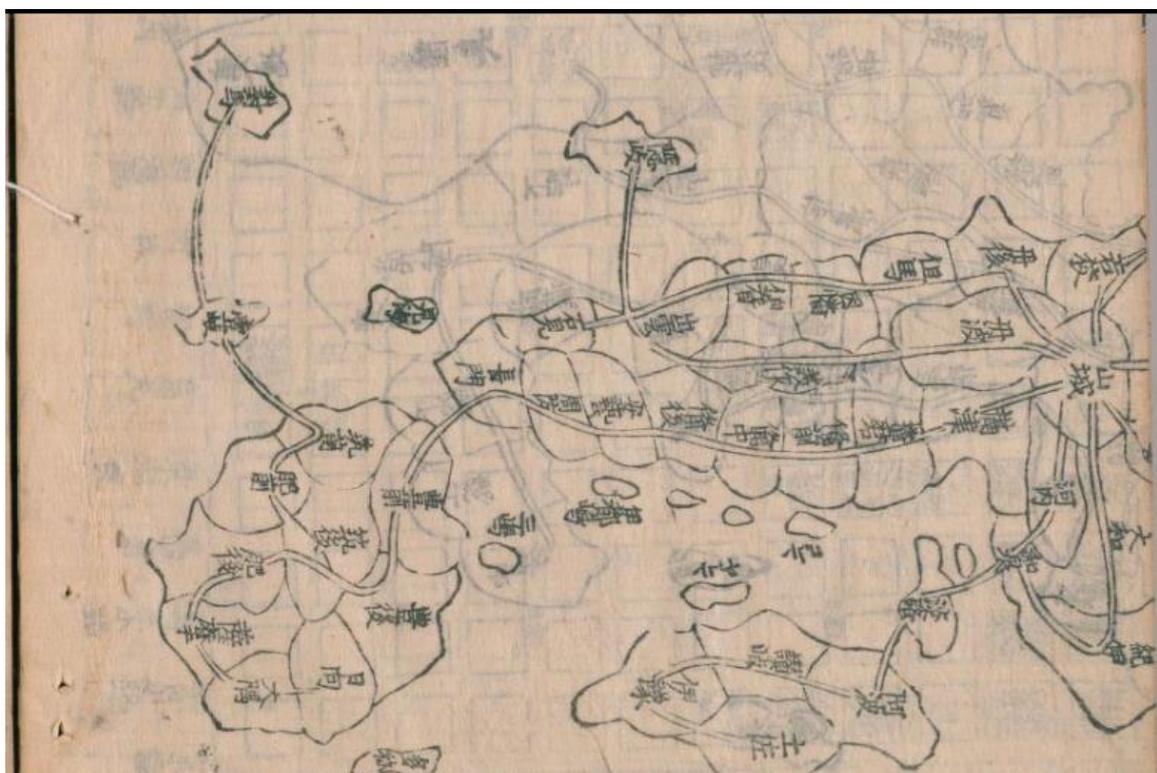


図 1 拾芥抄行基図 1277-1295 年

<sup>17</sup> 日本地理学史 P 50

<sup>18</sup> 日本地理学史 P 51

図1の「拾芥抄」図には、口永良部島はない。多禰・大隅・薩摩である。

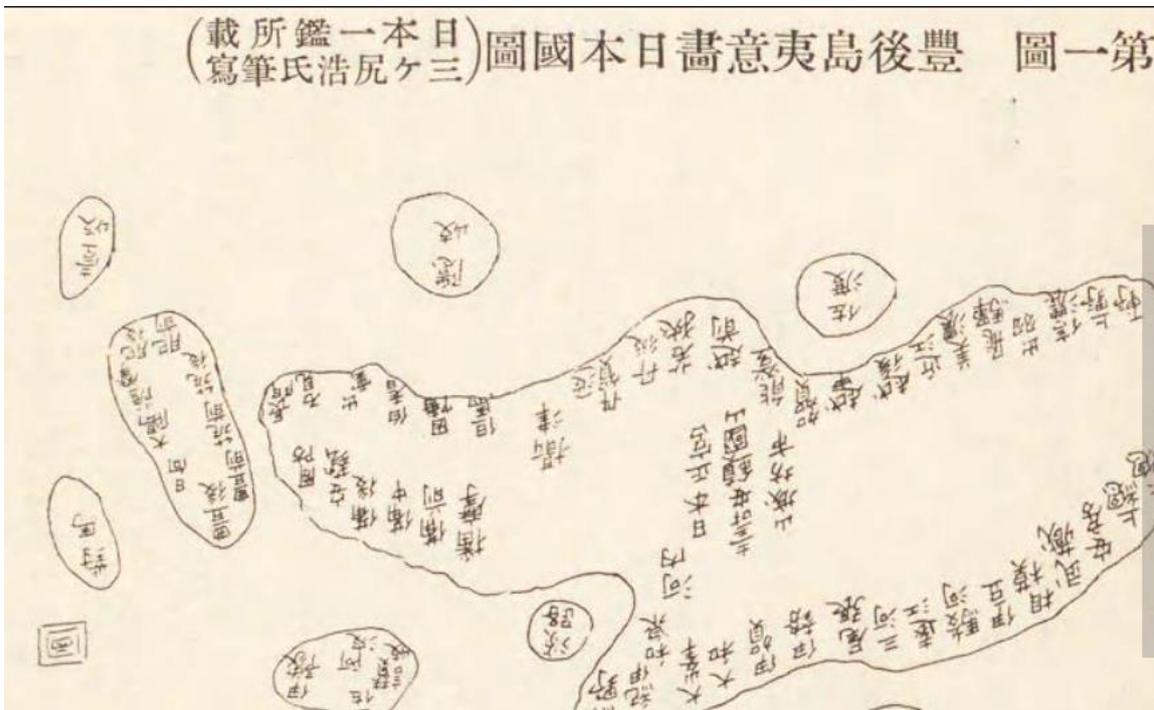
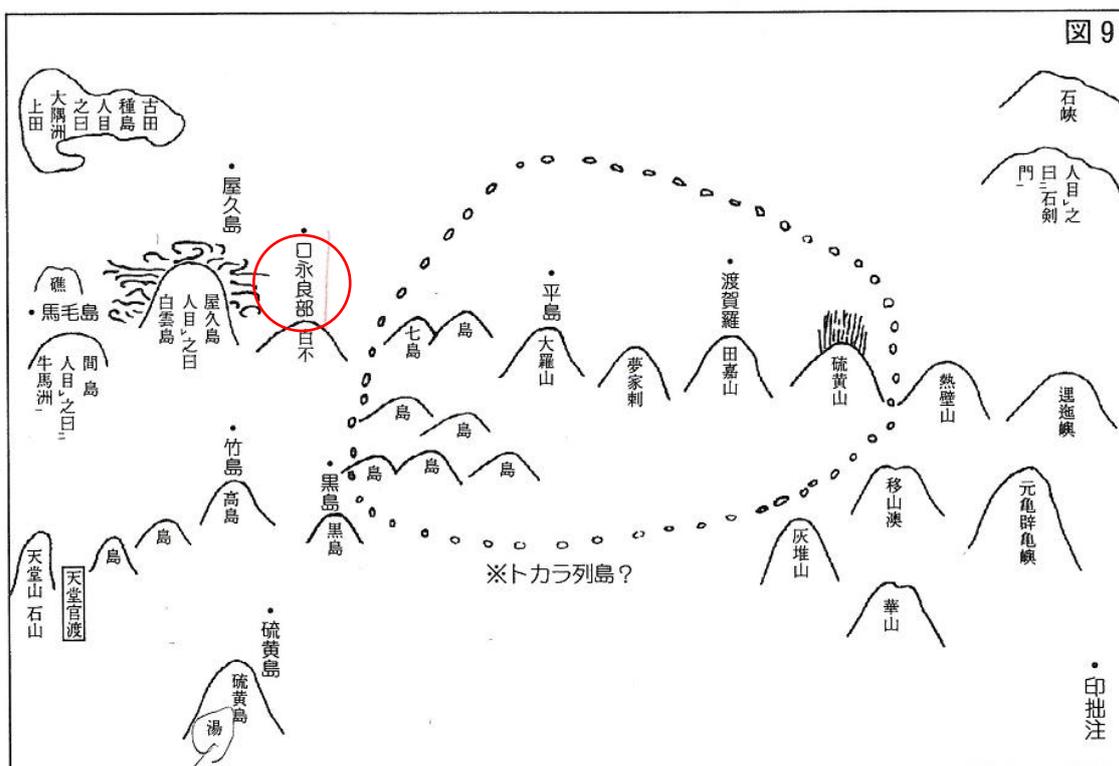


図2 日本一鑑所載續梓考略図

図2は、「日本一鑑」で、日向・大隅・薩摩・壱岐・対馬 がある。1557年



「日本一鑑」の（隴海新篇）にある地図。一応点線内をトカラ列島と推定した。

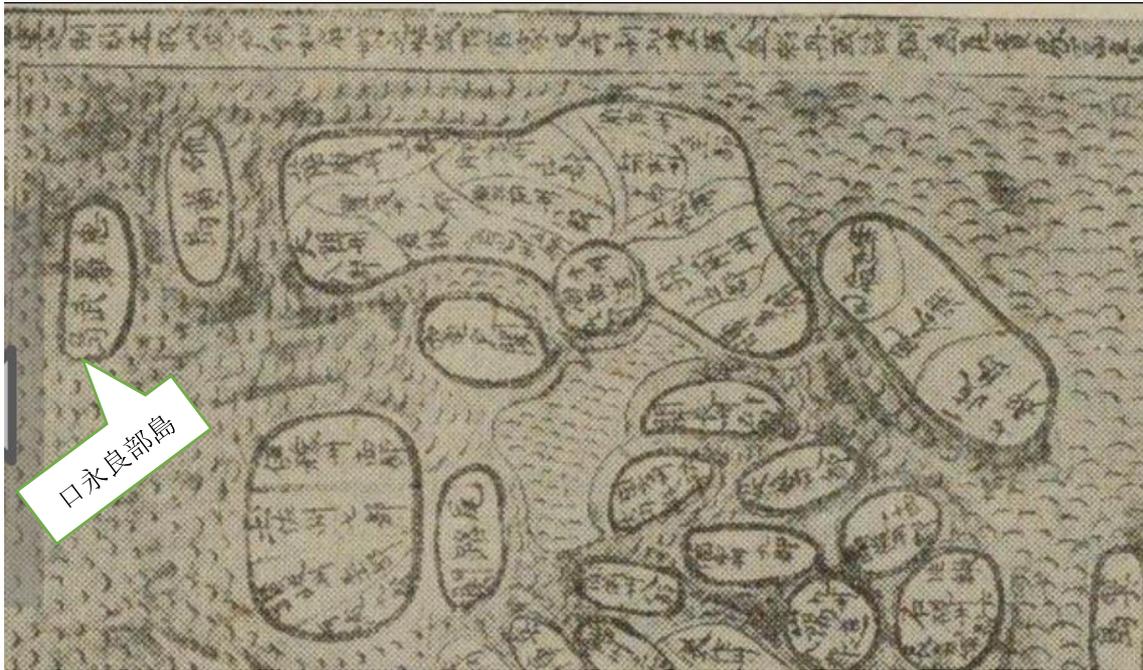


図 3 日本国図・朝鮮総督府博物館蔵 東山時代(室町時代中期 1436-1490 年)の地図 P 71  
 図 3 は、口永良部島がある。

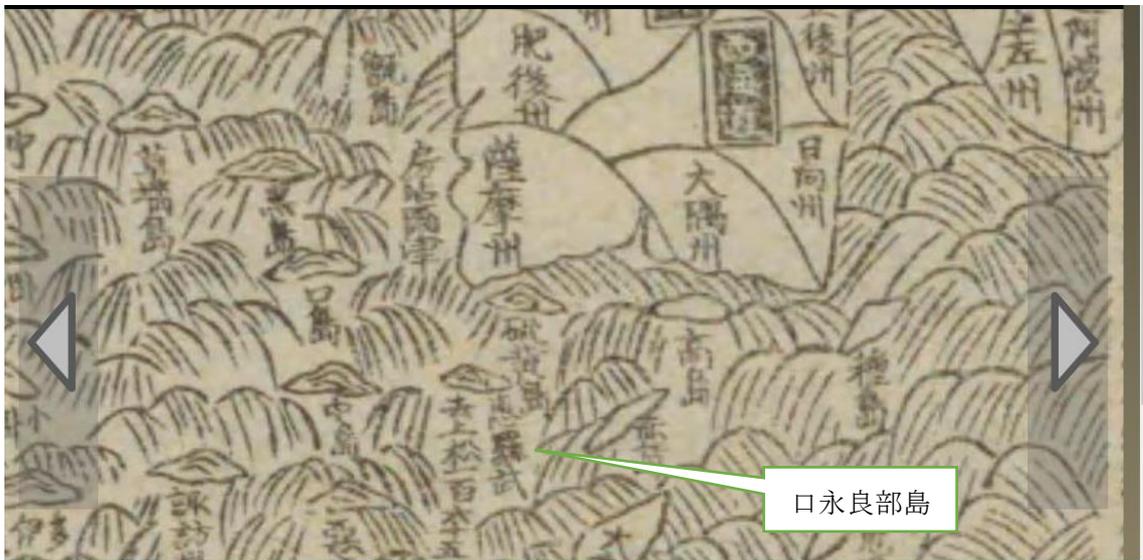


図 4 海東所国総圖 1402 年

図 4 にも口永良部島がある。日本総図が朝鮮に渡ったのは古く、日本の 1295 年に「行基大菩薩行状記」から 100 年後には「海東諸国総圖」が朝鮮で刊行されている。その間に於いても流布している。「海東諸国総圖」の事について『三島村誌』によると

日本で最も古いと一般的に言われている絵図は、「行基図」である。しかし、図1から解るように、この図には口永良部島はない。口永良部島があるのは、図3、図4でいずれも朝鮮の図である。だが「行基図」が1277年にできてから海外に流布していたことは間違いなく、特に志那、朝鮮に多かった。これは貿易をしていたことを意味する。戦国時代足利氏の時は特に海外に対して朱印船を出している。

403年	国境の標立てる		
608年	中国史料 屋久島「上屋久町誌」		
618年	日本史料 屋久島		
646年	大化の改新の詔 法令が定められた		
733年	「出雲風土記」完成		
738年	国郡の地図を献上 聖武天皇		
1277年	拾芥抄行基図		
1402年	「混一疆理圖」		
1408年	口永良部島登場		
1436年	日本国図 朝鮮総督府		
1453年	琉球の使者として朝鮮に入国した大商人道安が「日本琉球両国地図模画」を献上		
1471年	「海東諸国図地図」		
1557年	「日本一鑑」		
1609年	慶長14年 琉球王国に大島は含む		

図5 年表

口永良部にしても618年には日本史に出てくるわけだから存在が知られていなかったわけではなく遠い「辺境の地」と言う位置付けであったと推測する。

口永良部島が、徳川幕府時代から絵図上にできるようになったのは、薩摩島津家の直轄領になったからである。

「琉球王国は、1609年迄大島を所領していたのである。」<sup>19</sup>とあるが、1471年の「海東諸国図」の著は、歴史学者で1471年頃日本に来て見聞を広め状況把握をした。又「1443年に渡った事もある」<sup>20</sup>とあるので、室町時代の日本の詳細を国王の命により調べ帰って地図を作製したであろう<sup>21</sup>と推測される。又琉球王国は、1390年に朝鮮に施設を派遣している。その後1409年には、英祖王統の孫の思紹が遣使している<sup>22</sup>。「三島村誌」にある。

琉球王国から朝鮮国迄の経路であるが、「三島村誌」によれば

特に注目すべきは、朝鮮国から琉球王国への途中に恵羅武(口永良部島)がある。備前から

165里大島まで145里と書かれている。この距離約600km以を移動するという事は目的が薩摩・九州ではないと言う事だ。600年代から口永良部島は海上ルートの重

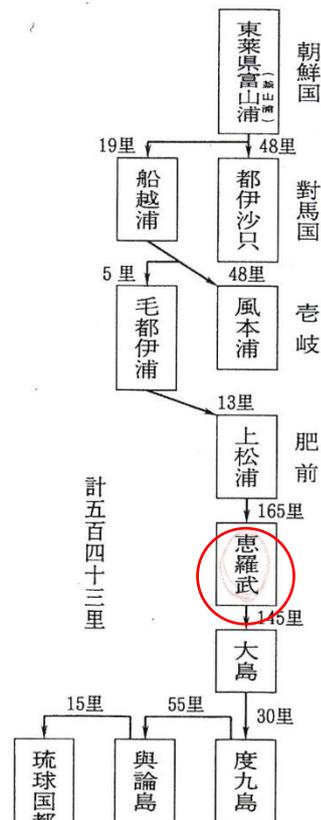


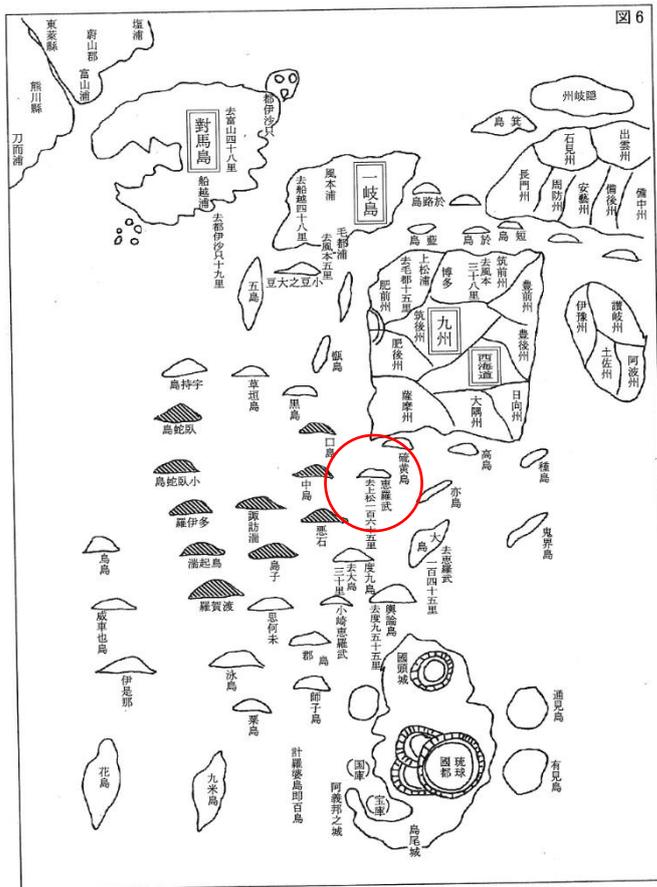
図6 朝鮮国から琉球王国経路

19 幕末の薩摩 P113  
 20 三島村誌 P488  
 21 三島村誌 P488  
 22 三島村誌 P489

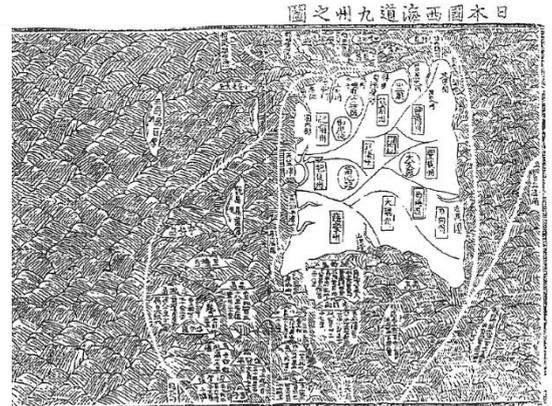
要拠点であった事であったことが解かる。

小括 異文化交流

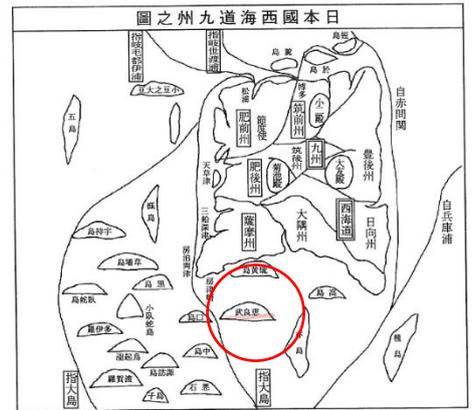
『琉球国絵図と近世の交通事情』によると「大島をはじめ喜界島、恵羅武島などが琉球に帰属していることが明記されている。」<sup>23</sup>とある。恵羅武島(口永良部島)は琉球に帰属していたとすれば文化圏としては、琉球文化である。朝鮮国の絵図は何故口永良部島が琉球に属していると明記したのか解らない。



『海東諸國総圖』をわかりやすく解説したもの。これでトカラ列島が、1471年のころ、はつきりと朝鮮国政府にも知られていたことがわかる。



『海東諸國記』(1471年、申叔舟)記載の『日本西海道九州之圖』である。白い線は当時の海路である。トカラを挟むようにして三本の線が走っている。



前掲『日本西海道九州之圖』を解説したもの。三本の白線はトカラ列島を囲み、九州と琉球列島を結ぶ重要路線であったことを示す。

図 7 朝鮮国地図の口永良部島

又、『琉球国絵図と近世の交通事情』によると、「津口、泊、湊など海上交通の要所たる港は厳密に区別されることなく使用されていたようである」<sup>24</sup>注には絵図に於いて異国船遠見番所が最初に登場するのは「正保琉球国絵図」である<sup>25</sup>と書いてある。正保国絵図は1644年に幕府が命じたものであるが、「元禄国絵図」には口永良部島に異国船遠見番所がある。正保国絵図では確認できないが、元禄国絵図で確認出ると言う事は、元禄国絵図は、1696年

<sup>23</sup> 『琉球国絵図と近世の交通事情』 P 73

<sup>24</sup> 『琉球国絵図と近世の交通事情』 P 75

<sup>25</sup> 『琉球国絵図と近世の交通事情』 P 79

に作成が命ぜられるので、50年程前より口永良部島は異国船の航海ルートであったことが推定できる。琉球国の帰属であったのは、口永良部島のみならず硫黄島、粟島、久米島なども含まれる。不思議な事に屋久島、種子島の存在が薄いのである。1185年に島津氏の支配になった事がある<sup>26</sup>が、鎌倉・室町と資料がない。図7より推測すると完全に琉球王国である。琉球王国の中の大島でありトカラ列島であり三島である。屋久島は、1島の位置づけである。琉球は海上交通ルートとして「東ルート」と「西ルート」がある。「東ルート」は、日本国進貢船である。「西ルート」は、朝鮮貿易に利用し頻りに往来があった事をこの詳細な絵図より確認できるものである。その域先々には、島々があり中継地としていた。又異国船遠見番所がある島は、貿易ルートにとっては特に重要な島であった。口永良部島が如何に重要拠点であったかが解かる史料である。又壱岐・対馬が非常に大きく描かれている事に注目したい。今後の検証は、何故トカラ列島「七島灘」をわざわざ超えて朝鮮と貿易を行ったのかについて検証する。

#### 参考文献

1. 藤田元春. 日本地理学史. 出版地不明：原書房, 昭和17年12月15日.
2. 洞院公賢. 拾芥抄 3巻 [4] 64/80. 出版地不明：国立国会図書館アーカイブ, 明暦2(1656)年.
3. 藤田元春. 日支交通の研究. 中近世篇 P15. 1938 2版.
4. 三島村誌編纂委員会. 三島村誌. 1990年.
5. 津波清. 琉球国絵図と近世の交通事情. 出版地不明：沖縄県立資料編集室, 1994-03-30.

#### 追記

##### 図について

図①②③④⑥⑦については、『日本地理学史』『三島村誌』寄りの引用である  
表⑤は自作である。

最後に、「口永良部島ポータルサイト」の山口英昌氏の助言を頂いたことに感謝します。志を同じくして島の活性化の為に御尽力頂いておられます。心から応援したいと思います。

---

<sup>26</sup>島津又七 - 又七の七不思議 - 11人の出処置は何処か④編 P3 表4より